

留学・研究計画書

氏 名 小島 敬裕	留学機関名 雲南民族大学
留学先国名 中華人民共和国	留学期間 西暦 2005 年 4 月 ~ 2007 年 3 月
研究テーマ (留学目的) 中国雲南省徳宏における宗教と社会変容の地域間比較研究	
研究テーマ (留学目的) の説明	
<p>東南アジア大陸部、西南中国をはじめとする地域で信仰されている上座仏教と社会の人類学的研究は、特に 1950 年代から 70 年代にかけて盛んに行われた。中でもスリランカ、ビルマ（ミャンマー）、タイにおける上座仏教の宗教実践について、ヒンドゥー教、精霊信仰、政治権力との関わりの中で機能論的、構造論的な解明が試みられてきた。しかし国民国家をひとつの単位とする極度にモデル化された議論によって、地域における宗教実践の多様性が見過ごされてきた部分も多い。特に近年では上座仏教文化圏における社会変化の急激な変化にともなって、各地で新しい宗教活動の展開も見られ、従来の議論を再検討する必要性が生じている。</p> <p>1990 年代以降、タイを除いて調査が困難であった地域においてもようやく調査許可が認められ、広範な地域における比較調査が可能となりつつある。こうした状況において、上座仏教文化圏における多様な宗教活動のあり方を地域社会の文脈から再考することによって、従来の議論を見直し、さらに発展させることができるものと考えられる。</p> <p>本研究の対象地域である中国雲南省徳宏タイ族ジンポー族自治州の瑞麗、およびビルマのシャン州のムセ・ナムカン地域一帯は、1886 年のビルマ英領化以前までムンマオと呼ばれるひとつの「盆地国家」を形成していた。そこにはおもにタイ族（ビルマ側の呼称はシャン族）が居住し、15 世紀ごろから上座仏教を信仰してきた。ただ同地域は王朝時代以来、中国、ビルマ、北タイの文化的影響を受けたため、ビルマ上座仏教の影響をもっとも強く受容しているものの、北タイ系の上座仏教、さらに大乘仏教の影響も受け、他の上座仏教文化圏とは異なる文化的特徴が見られる。その後 1886 年のビルマ英領化に伴い、ムンマオが中国と英領ビルマというふたつの異なる国家に編入されると、国境を挟む両地域の宗教実践に差異が見られるようになる。特に中国側の瑞麗では戦後の文化大革命によって上座仏教は大きな打撃を被ることになる。1980 年代に到ってようやく信仰の自由が認められたため、現在では上座仏教の復興が試みられているが、僧侶の不足という事態に直面し、宗教活動はおもに在家信者によって行われている。また儀礼などの際には国境を越えたビルマ側のシャンの僧侶が大きな役割を果たすなど国境を越えた交流が行われており、他の上座仏教文化圏とは異なる歴史的経緯と特徴が見られるのである。</p> <p>本研究では、国民国家の枠組みの中でとらえられてきた上座仏教と社会に関する従来の議論を超え、政治的中心の周縁に位置づけられてきた地域において、いかなる信徒の活動が行われているかについて明らかにしようとするものである。特に中国、ビルマという国家体制において、上座仏教が制度化されていく状況において、国家という枠組みを超えた宗教的交流がいかに行われているか、という問題について解明することを目的としている。</p>	

成果報告書

記入日 2007 年 12 月 18 日

氏名	小島 敬裕	留学先国名	中華人民共和国	所属機関	雲南民族大学
研究テーマ：中国雲南省徳宏における宗教と社会変容の地域間比較研究					
留学期間：2005年9月～2007年11月					
<p>中国雲南省徳宏タイ族・ジンポー族自治州は、中国とミャンマーの国境に位置する地域である。徳宏州にはおもにタイ族が居住し、ミャンマーの影響を強く受けた上座仏教が信仰されている。しかし徳宏地域における上座仏教の実践には、東南アジア大陸部を中心とする他地域の上座仏教文化圏とはことなつた特徴がみられる。それゆえ、徳宏地域における上座仏教の実践のあり方を明らかにすることは、従来の上座仏教にかんする議論に再考を促す可能性を持っていると考えられるが、今まで本格的な調査研究は行われてこなかった。本研究の目的は、まず徳宏地域における宗教実践の実態を、フィールドワークによって明らかにするとともに、他地域の実践との比較を行い、その相違の要因を、地域社会や国家とのかかわりにおいて明らかにすることにある。</p> <p>こうした研究を行うにあたっては、現地における長期間の住み込み調査が必要となる。その際、漢語のみならず、徳宏タイ語の習得は不可欠である。また現在、中国において長期間の調査許可を取得することは非常に困難な状況におかれているが、調査地の関係者との長期間にわたる信頼関係を築くためには、正式な調査許可を取得することが必要である。そのため、留学期間の前半に相当する2005年9月から2006年9月までは雲南省昆明市の雲南民族大学において、漢語と徳宏タイ語の基礎を習得するとともに、調査許可の申請を行った。後半の2006年10月から2007年11月までは、徳宏州瑞麗市郊外の農村において、定着調査を実施した。以下、昆明・瑞麗のそれぞれの地域において、どのような成果が得られたかについて報告する。</p> <p>まず昆明での行動である。漢語に関しては、留学生用クラスの「高級班」に所属し、平日の午前中はほぼ毎日授業に出席した。そのため、課題であった口語のレベルも向上し、標準語（普通話）であればほぼ問題なく会話ができる程度に達した。また2006年4月に受験したHSK（漢語能力試験）では8級に合格した。徳宏タイ語は、1週間に2～3回程度、個人授業の形式で受講した。徳宏タイ語は今回が初めての習得であり、また昆明では話者がきわめて少ないという事情もあり、文字と発音、基本的な文法は習得できたものの、会話については初歩的な会話ができる程度にとどまっていた。しかし後に現地調査を行う際、正確な文字表記法を習得しておいたことは、有益であった。徳宏タイ語は特に発音が難しく、文字なしでは誤って記録してしまう可能性があるためである。</p>					

また大学図書館には、少数民族関係の図書が多く蔵書されており、貴重な資料を入手することができた。休日には昆明市内の書店や古書店をまわり、タイ族や徳宏地域誌、少数民族の宗教、文化、政策、法律などにかんする資料を収集した。

さらに留学の成果として挙げられるのは、多くの知己を得られたことである。雲南民族大学は少数民族の幹部養成をおもな目的としているため、調査対象である徳宏タイ族の教員、学生も数多く在籍している。また調査地の政府の役人にも、民族大学出身者は多い。彼らとの人間関係を築いたことは、現地調査を行う際に、大いに役立った。また特に東南アジア各国からの留学生が多く、彼らとの交流を深められたことは、今後、地域間比較研究を進める際に、有益となるものと考えられる。このほか、昆明在住の漢族の友人に恵まれたことも大きい。前述したように、私は地域における宗教実践のあり方を、社会とのかかわりにおいてとらえようとしているため、彼らとのつきあいは、現代中国における人々の日常生活について理解を深める意味でも有意義であった。

以上の昆明での活動のほか、大学の休暇期間中を利用して雲南省各地を訪れ、予備調査を行った。具体的には、調査地である徳宏州瑞麗市のほか、タイ族の居住する西双版纳州、徳宏州潞西市、盈江県、隴川県などの地域を網羅的に訪れ、地域間比較のための基礎的な調査を行った。特に、民族大学の学生や教員の実家を訪ね、現地での人間関係を築いておいたことは、後に本調査に入る際に、大きく益することとなった。

2006年3月からは大学側と調査許可申請のための交渉を開始した。幸い、副学長が私の調査に対して理解を示してくださったため、大学を通して雲南省政府に申請を行い、2006年9月には1年間の調査許可がえられた。現在、雲南省においては外国人による長期の調査許可が得にくい状態となっているにもかかわらず、調査許可を得られたのは、副学長を始めとする諸先生方のご協力があったためと考えられる。そうした意味でも、雲南民族大学に在籍したことは非常に有意義であった。

2006年10月からは、雲南民族大学に訪問学者として在籍しながら、徳宏州瑞麗市の農村において、住み込み調査を開始した。昆明での調査許可取得に約半年の時間を要したのと対照的に、瑞麗市の公安当局などでの手続きは比較的容易で、調査はスムーズに行うことができた。

居住したのは、瑞麗市の中心部から7キロほど離れたJ村の農家である。村の規模は237戸、人口は約1000人であり、瑞麗では比較的大規模の村に属する。調査村の住民の大部分はタイ族で、漢族がこれに続く。瑞麗市は国境の瑞麗江をはさんでミャンマー国境に隣接しているため、J村からもミャンマー側の山並みを見渡すことができる。

毎日の生活は、午前中を徳宏タイ語の習得にあてた。瑞麗では農村部でも、多くの人が漢語を話せ、また僧侶や尼僧（ライハウ）であれば、ほぼ全員がビルマ語を話せるため、当初、インタビューは漢語やビルマ語で行なっていた。しかし村内に居住する徳宏タイ語の先生、そして多くの僧侶や尼僧、村人たちの協力のおかげで、最終的にはタイ語でインタビューできるまでになった。

現地滞在期間中に行ったのは、まず年中儀礼の調査である。具体的には、2006年10月から11月にかけての袈裟の布施儀礼（ポェカンティン）、11月のタイ新年（ピーマウタイ）、2007年2月の春節（ポェロンシー）、4月の清明節、水かけ祭り（ポェソアンラム）、5～6月の村直しの儀礼（メーマーン）、7月の雨安居入り（ハウワー）などを参与観察した。また雨安居に入ると、ヒーンラーイと呼ばれる老人たちが布薩日（ワンシン）ごとに寺院へ籠って戒律を守る儀礼（ロアンゾアン）、相互の村落を訪問し寺院や僧侶に布施を行う儀礼（ソンベン）、死者のために幟をたてる儀礼（プックホアン）などが行われる。これらの儀礼が行われる日には、私も必ず参加し、聴き取り調査を行った。2007年8月に、予定していた留学期間は終了したが、いくつかの重要な儀礼を未見であったため、期間を若干延長し、10月の出安居（オックワー）儀礼、11月の雨安居明け8日目の儀礼（ポェサウサーム）を調査した。

年中儀礼以外には、仏像奉納儀礼（ポェパラー）、沙弥出家式（ポェハムサーン）、得度式（ポェハムモン）、結婚式（ヒェアック）、葬式（マーサー）、家の新築祝い（ポェホンマウ）などにも参加することができた。これらの祭りに参加することにより、彼らの宗教実践に対する理解を深めることができたのみならず、瑞麗盆地の各地に多くの僧侶、尼僧、在家信者の知己を得て、彼らから貴重な情報を提供していただいた。具体的には、瑞麗市内の僧侶、尼僧の止住する寺院をすべて訪問し、寺院や彼らの経歴、行動などについての聴き取り調査を行った。出家者のみならず、在家が仏事を行う際に読経を主導するホールー、老人の代表として仏事を司るサンマティ、仏教にもとづく呪術的な力をもとに治療行為や占いを行うサラー、精霊（ピーまたはザウ）を体内に導き入れることよって治療行為や占いを行うザウラーン（女性の霊が乗り移った場合）・ザウザーイ（男性の霊が乗り移った場合）などの在家にも可能な限り面会し、彼らのライフヒストリーや具体的な活動にかんする聴き取り調査を行った。以下では、これらの調査に基づき、特に重要だと思われる点について述べる。

まず大きな問題は、東南アジアの上座仏教文化圏と同様、徳宏でも各村落に寺院が存在するものの、僧侶不在の寺院が非常に多いことである。従来の研究において、上座仏教は僧侶が担い手の中心であるとされてきた。在家信者は僧侶への寄進によって功德を積み、それによって現世、または来世での幸福を得ようとする。つまり僧侶は布施の「受け手」として必要不可欠の存在である。また出家して僧侶となることは、大きな功德を積むことができるため、上座仏教を信仰する諸国では多くの僧侶が存在するのだと解釈される。ところが、瑞麗市内に存在する138寺院中、僧侶が存在するのは、わずか19寺院にとどまっている。こうした状況は、ミャンマーやタイなどの上座仏教諸国と比較した場合、きわめて特異である。もちろん、徳宏は文化大革命を経験したため、多くの僧侶が還俗、またはミャンマー側へ逃亡したことは、東南アジアの場合と条件が異なるが、信仰の自由が認められた現在において、同じ中国国内の西双版納では僧侶数が再び増加したのに対し、徳宏の僧侶数は依然として増加していないのである。

しかし彼らが仏教を軽視しているわけでは決してない。では誰が宗教活動を主導しているのかというと、前述のホールーや、サンマティ、ヒーンラーイと呼ばれる村の老人たちである。彼らが仏陀（パラー）、祖霊（マタービードゥー）、村の神（ザウマーン）、国の神（ザウムン）

へ祈祷を行うとともに、食物の寄進が行われる。もちろん、村によっては僧侶が招かれる場合もあるが、招かれなくても儀礼は成立してしまうのである。

この問題について、筆者はほぼ毎日のように、在家信者や僧侶に問いかけを重ねたが、僧侶をおく村の人々に尋ねると、「寺院の掃除や仏像への食物の布施をするために必要だからおいた」「僧侶をおくことによって村としての面子が示せる」といった返答が多い。逆に僧侶をおかない村の人々に尋ねると、たいてい「費用がかかりすぎて僧侶を養えない」「毎日食事の世話をするのが面倒である」ため、「大規模な儀礼を行う際など、必要な時だけ他寺院から僧侶を招けばよい」という答えが返ってくる。また病気や災難に直面した際、守護（グム）してくれるのは仏陀や神、祖霊であり、僧侶はこれらへの守護の要請を助ける存在にすぎないのだという。僧侶と同様に、ホールーやヒーラーイなども守護を要請することができるため、僧侶は必ずしも、常時必要だというわけではない。つまり、徳宏の仏教徒にとって、直接的に在家を「守護」するわけではない僧侶は、必要不可欠な存在ではないのである。

以上のような僧侶を招く側の問題のみならず、僧侶のなり手の問題も存在する。瑞麗市内に止住する僧侶について悉皆調査を行った結果明らかになったのは、中国領出身の僧侶は数名しか存在せず、大部分はミャンマー側から招請され、中国領内の寺院に止住していることである。ではなぜ中国側に出家希望者が少ないのか。第一の要因として考えられるのは、前述のように中国側では文化大革命の影響を受け、1960年代から70年代の10年間以上にわたって出家の慣行が断絶してしまったからである。また1979年からは一人っ子政策が実施されたため、中国側ではミャンマー側より子供の数が圧倒的に少ないことが大きな要因である。さらに学校教育の問題もある。中国では1986年以降、9年制義務教育が実施されたため、大部分の子供たちは学校へ通わなければならない、沙弥出家するケースはきわめて稀である。また両親も、子供を学校へ通わせたがる。というのも、1980年代以降の改革開放路線の推進により、中国側では経済発展が著しく、経済的に大きな収入を得るためには、学校教育を受け、特に漢語を学んでおく必要がある。しかし寺院で出家した場合、漢語を学ぶことができないため、還俗した場合には、経済的に不利な条件におかれることになる。以上のような要因によって、出家希望者は減少し、学校へ通う子供が増えたのだと考えられる。

これに対し、ミャンマー側では一人っ子政策も存在せず、貧困家庭や多くの子供を抱える家庭の場合、子供を出家させるケースが多い。またミャンマー側では、長い間ビルマ軍・シャン軍・カチン軍の間で戦闘が続き、子供を軍隊にとられることを避けるために出家したというケースもある。さらに共産主義化を経験しなかったため、仏教に熱心な家庭が多い。こうした条件の相違が存在するため、ミャンマー側では中国側とは異なり、出家者が多いのだという。

しかしなおかつ存在する疑問は、前述したように、西双版纳では文革後、僧侶数が回復したのに対し、徳宏では文革後も僧侶数が増加しないのはなぜか、という問題である。この問題について聴き取りを行った結果明らかになった要因は、西双版纳では伝統的に、男子一度は出家すべしという慣習が存在するのに対し、徳宏では文革以前から出家は希望者のみであり、通過儀礼としての意味合いは持っていなかったという点である。こうした伝統は現在にまで継承さ

れており、西双版纳では義務教育制との兼ね合いから、学校に通学しながら一時出家するという慣行が定着する一方、徳宏では子供の減少、義務教育の普及にともなって、自然に僧侶数は減少したのだという。

次に重要だと考えられる要因は、家系（ハーホン）存続の問題である。西双版纳では基本的に、家系という概念が存在しないため、姓も持たない。それゆえ結婚後、一定期間は男性が女性側に居住し、その後経済条件によって自由に居住先を決めてよい。これに対し、漢族の影響が強い徳宏地域では、漢族と同様、男性中心の家系を重視し、それが絶えてしまうことを恐れる。結婚後は男性方への居住を基本とし、両親を扶養するのも、基本的には一番下の男子である。さらに中国では一人っ子政策が実施されたため、男子が出家した場合、家系を存続する者が存在しなくなってしまう可能性がある。そのため、徳宏では西双版纳と異なり、親も男子を出家させようとしはないのではないかと考えられる。

以上のような要因によって僧侶数の少ない徳宏では、特にここ十数年の間に、先述したザウラーン、またはザウザーイと呼ばれる呪術師が急増し、在家信者の広汎な信奉を得ている。特に徳宏州内の瑞麗以外の地域では、瑞麗よりさらに僧侶数が少ないため、この傾向はより顕著であり、たとえば盈江地域ではヤーモットと呼ばれる呪術師が数多く出現し、瑞麗では僧侶が担当する葬式や村直しの儀礼までとりおこなっている。このように、仏教的な守護力よりもむしろ精霊の加護を求めるケースが増加しつつあることは、他の上座仏教文化圏にはさほど見られず、徳宏に特徴的な現象として興味深い。僧侶が存在しない場合、上座仏教の信者はどのような宗教的行動をとるのか、ということをはっきりと示す事例として重要だと考えられる。

また興味深いのは、戒律をめぐる問題である。上座仏教は「戒律仏教」とも称せられ、僧侶は 227 の戒律を守ることを義務付けられている。そして先行研究では、僧侶が戒律を守ることによってサンガ（僧団）の清浄性が保たれ、清浄なるサンガに対して布施を行うことによってこそ、在家は功德を積むことができるのだとされてきた。実際、国境を越えたミャンマー側では、五戒に触れる飲酒は、僧侶はもちろん、儀礼の際には在家でさえ慎む。しかし中国側では、儀礼の際に一般の在家が飲酒することは、ごく一般的である。瑞麗を離れた地域では、僧侶の飲酒はしばしば見られ、在家はそれを非難するどころか、僧侶に飲酒を勧める場合さえある。この理由について僧侶に問うと、瑞麗から遠い地域ではポイズアン派という宗派が多く、この宗派では飲酒も認められていた。瑞麗ではトーレー派という戒律厳守の宗派が多いため、飲酒が認められないのだという。国家によって戒律違反が取り締まられているミャンマー側とは異なり、中国政府は国家統合にとって問題のない限り、宗教活動の干渉に関心を持たない。それゆえ、中国側では戒律を守るかどうかということが、重要視されないのだと思われる。

以上のように、戒律仏教、あるいは出家者中心の仏教といわれる上座仏教とは大きく異なった実践のあり方について調査することができたことの意義は大きい。今後考察をすすめることにより、従来の上座仏教にかんする議論を再検討していきたいと考えている。

最後に、本研究に対して多大なご支援をいただいた松下国際財団に対し、心からお礼申し上げます。